

## Tlajomulco, Santacruzにおける不安と社会性と経済的側面に関する研究

野村, 暢清

<https://doi.org/10.15017/2328613>

---

出版情報 : 哲學年報. 40, pp.59-81, 1981-03-31. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

# Tlajomulco, Santacruz における不安と 社会性と経済的側面に関する研究

野村 暢 清

## (一)

メキシコのカトリシズムと日本のキリシタンは十六世紀に同じイベリヤ半島から流れ出た同系統同種のカトリシズムである。メキシコのカトリック文化の分析に当って、この両者を考え合せながらほどこいていくことは重要な分析視点の一つである。

本研究はメキシコ文化の中でのカトリシズムの機能を捉えて行くのに、ヨーロッパ的因子を強くもっているグアダラハラ周辺地域を選択し、その中での蒐約的調査地域として、そこから約35キロ南のトラホムルコ及びサンタクルツという二ヶ村を選択した。

理論的問題点としては、宗教的文化統合の理論に主として関係する。宗教現象はその文化の基底部にあって、文化諸因子を、或る部分は強く、或る部分は弱くではあるが、全体的に色づけているものであるという考え方にかかわる。その色づけ方は具体的にはどのような形で展開しているのか、このような宗教的文化統合と不安-内調整のメカニズムはどのようにかかわっているのか、このような問題点をメキシコのカトリック村落の中で捉えて行ってみようとするのである。

先に、別稿において、この両村落のカトリック的空間構造、カトリック的時間構造、及び社会構造の側面に言及した。本論文においては宗教的文化統合と不安と社会性、及び経済的側面の問題を取り扱って行こうとする。

この中南米地域は、カトリック的文化統合を構成すべく、その植民が展開さ

れて来たのである。その姿はフライ・バルトロメ・デ・ラス・カサスなどの生涯の姿の中にみて行くことが出来る。新大陸全体は全く一つのものとして、そのキリスト教化がスペインの義務とされていた。植民・征服への王室の権利は霊的なキリスト教化の可能ということの上になつたものであった。インディオはスペイン人の如く生活することが出来るか、キリスト教を受け入れることが出来るかということが中南米植民の重要な問題点であり、信仰を伝えるということがその支配を正当化する根拠であった。キリスト教を受け入れることを拒否しない限り、インディオは奴隷とはされ得ないのであった。1514年6月14日新世界で初めて読み上げられた *requerimient* 催告が、その姿を明確に示している。インディオの村々で、これを読み上げて、それが受け入れられない場合に戦に入ったものであるが、その内容は天地の創造から、世界の歴史を述べ、ローマ法王権の成立、それから諸島やティエラ・フィルメの地を法王アレクサンダー六世からスペイン国王へ贈与されたことの宣言などがつづき、インディオは、義務として、全世界を支配する教会及び法王、その代理者としてのカスティリヤの王権を承認すること、キリスト教を受け入れることを要求されたのであった。このような催告をよみ上げてから戦に入ったのである。

インディオは本来奴隷たるべきかどうか、その理解の能力はあるものかどうか、このような議論が盛んに行われていた。修道者は比較的多くが、インディオの能力の肯定の側に立ったが、インディオの理解不能の方を支持する修道者もあった。このインディオの側に最も強く立ち、スペイン宮廷で反対派の人々とはげしく戦い、また中南米でもインディオ伝道の側ではげしく働き、チャパスの第二代の司教として活動した人がフライ・バルトロメ・デ・ラス・カサスである。彼は1537年から5年間、ドミニコ会の彼の仲間以外のスペイン人のトクストラ地域への立入禁止の権利を得、それを前提として平和伝道を行った。インディオの言葉で天地創造、人間の墮落、楽園からの追放、キリストの生涯と奇跡などを歌にし、それをインディオの商人に歌わせてインディオの改宗につとめていった。生月でもこれらの人間の墮落や追放、キリストの生涯の聖劇が行われている。彼は1544年チャパス Chiapas の司教区を広げることの許可を

得てもいる。ガテマラからグチエレス、シナカンタン、ラス・カナス地区は彼の司牧地であったと考えられる。

以上のような、キリスト教社会の構成ということ、それが、中南米植民の表面の理由であった。このことを中南米文化の理解の為には、先ず知っていなければならない。この当時、ラス・カナス達によって、植民地の村落の構造について、教会とプラサ（広場）を中心とした村落構成の定型についての論議もなされている。

このような伝統の上にたつ地域でのカトリズムを中心とした宗教文化の分析である。

チャパス地域の調査もシナカンタンやチャムラに関して若干行ったが、ここではサンタクルツ、トラホムルコに関する分析のみを述べていく。

空間構造に関し、これらの村々が垂直面に関しても、水平面に関しても教会とオスピタルとプラサを中心とするカトリック的空間構造を展開しており、その空間構造がカトリック的メンタリティを育てることの側面で働くことを観察した。同じ村落でのカトリック的時間構造の展開や社会構造の存在についても別稿において、既に明かにした処である。

ここでは、このようなカトリック的宗教文化統合のもつ、不安の側面の姿や経済的局面の在り方などを明かにしていく。

不安の側面については、主としてMMPIの結果から言及していく。

## (二) 不安の側面に関する分析

この不安の側面の研究をメキシコのカトリック村落で行おうとするのは、この側面が宗教現象にとりて最も重要な問題点であるからでもあるが、日本のキリシタン・カトリック村落においても同じMMPI<sup>(1)</sup>によるテストを行い、キリシタン・カトリックが村落が、隣接村落に比して不安の方向をもち、同時に強い社会性をもっていることが取り出されているからである。隣接する両側の村落、キリシタン・カトリックの局面以外は全く同じである村落に比して、ここでは不安の度合が高く、社会性の度合も高いことが取り出されている。山を背

にして、海に面して並ぶ三つの村落、三重、黒崎、神浦の三村をとり、親族構造、土地所有の様式から、メンタリティなどに関する諸文化特性の調査を行った。両側の三重、神浦二村は非キリシタン・カトリックの村落であり、中間の黒崎のみがキリシタン・カトリック村落である。諸文化因子の比較分析を行っているが、ここで、今問題とするのは、三重中学、神浦中学、及び黒崎中学の三年生に関して行った Picture Frustration Test, や MMPI の結果である。

ここでは、黒崎中学三年のMMPI の結果を中心に取り扱っていくこととなる。中三の一クラス48名の分析である。日本の場合も、メキシコの場合も既成のテストを使用している。実施に際して、学校のテストとして行<sup>(2)</sup>ってもらおう為である。

黒崎の場合、先ず48名のキリシタン・カトリックの生徒達を17の宗教項目への反応によって宗教度に関して測定した。その結果にもとづいて生徒達を宗教度強から宗教度弱にならべる。次に宗教度の最も強いものから12名を宗教+集団とし、弱い側から9名をとって-集団とする。次に更に強い方からの20名を+集団とし、弱い方からの20名を-集団とする。次に、この人々をMMPI の普通の分析様式でほどいて行き、各群毎の平均値を出す。すると Hs, hypochondriasis scale について宗教+粗数平均8.75, 宗教+7.4, 宗教-6.35, 宗教-6.11 となる。Hy, hysteria scale についても平均値宗教+19.41 宗教+18.3, 宗教-16.85, 宗教-17.38の如き姿を示している。宗教強の方向に動くにつれ Hs, Hg, Pt, Sc の方向のたかまる姿を示している。

次に anxiety に関する47項目への姿から不安度を取り出した。この項目全体への反応の姿の中から anxiety の度合を取り出したのである。すると、平均値としては勿論、47項目の中の種々の場面でも anxiety の強い方向を示している。宗教+や宗教+の人々は、何かにつけてよく心配する方で、小刀など先の尖ったものを使うのをこわがり、眠りがとぎれ勝ちで、心配で眠れないことの多い傾向を示している。宗教+宗教+は神経症で心配性な方向を示していた。

処で同時に、この宗教+宗教+の人々は社会性への強い方向をも示していた。社会性の強度は22の社会性関係項目への反応の中で捉えられている。平均

値として高いだけでなく、多くの個々の場面でもこの方向を顕著に示している。

笑い楽しむようなパーティや寄り合いに出席するのがすきで、クラブや集合に入りた方で、バスや汽車などで知らない人に話しかける方でもある。

宗教：宗教+の人々は Hs, Hy, Pt, Sc などの方向や不安度に関して強く、同時にこのような社会性への方向をも示しているのであった。

このような結果からカトリックの宗教的文化統合の情緒的色調として、神経質、心配性、不安の色調が含まれ、同時に社会性の強い方向があるのではないかとということが考えられるのである。

このような特徴は、他地域のカトリック集団でも見られるかどうかということが問題点であった。

そこで、私の調査地であるグアダラハラ周辺地域でも MMP I を行ったのである。ここではメキシコの Dr. Rafael Nùñez によって採用された Hathaway と Mckinley による *Inventario Multifasico de la Personalidad MMPI-Español* を使用した。ここでも学校のテストとして行ったものである。

処で、ここメキシコでも、より強くカトリックを支える人はより心配性な人々、不安因子をもった人々であり、また強い社会性をもっている人々であるという結果が取り出されたのである、次にその姿を細かに記述していく。

メキシコの場合も、宗教関係項目、不安関係項目、社会性関係項目を群として使用して行った。各それぞれの項目の姿は、日本語とスペイン語でそれぞれ若干異っているものもあるが、群として、宗教性、不安度、社会性を捉え、比較して行くのには充分であると考えている。勿論英語版を中心として日本語版へ、またスペイン語版へとつながっているものである。本来は同じでなければならぬが、これらは決して全く同じではない。

宗教項目を例として取り上げてみよう、日本語版は日本に適應するようにと若干の変更を行っている。

日本語版の「よく神社やお寺におまいりする」「神や仏はある」などがそのような形の変更である。Voy a la Iglesia casi todas las semanas. 殆んど毎週

教会に行く。Creo que hay un Dios 唯一の神の存在を信ずるなどである。後者の一つの神の存在は神や仏はあるとは少し意味内容は異なる。しかし回答は同じこととなっているであろう。

「キリストは復活する」「あの世には悪魔もいるし地獄もある」という日本語版の前者は少し異なる。Creo en la segunda venida de Crist はキリストの再来を信ずるのである。復活とは異なる。英語も second coming である。後者は Creo que existe el diablo y el infierno 私は悪魔と地獄はあると信ずるのである。メキシコの感覚では、悪魔はあの世ではなくて、此世にいるのである。したがってあの世はとれている。英文にはあの世 in afterlife がある。これと同様のものとして日本語の「世の中のことはすべて予言者の予言通りになっていく」は Todo está ocurriendo tal como los profetas de la Biblia lo predijeron. すべてのことはバイブルの予言者が予言したように起っているである。この方が信仰の思考としてはよりすなおである。日本語のなっていくは英語 is turning out から来ている。

日本語の「非常に変わった宗教体験をした」は he tenido experiencias religiosas extraordinarias であるが、これは変わった。なみならぬ宗教体験をもっているである。

このような種々の問題点を含んではいるが、宗教性の強度測定は群として両者で可能であると考えている。宗教度測定に使用したものはスペイン語版の 27, 53, 58, 95, 98, 115, 202, 206, 209, 249, 258, 315, 369, 373, 420, 476, 483, 490, 491 など19の項目である。

不安度測定項目に関しても、社会性測定項目に関しても、同様の姿が存するが、群としての強度測定の場合には差しつかえないと考えている。不安度測定に用いたものは、スペイン語版の43, 73, 76, 86, 106, 152, 166, 211, 217, 236, 242, 270, 264, 317, 337, 339, 340, 354, 362, 385, 388, 392, 431, 442, 480, 543, 553, 555, 559の29項目である。社会性測定に用いたのは、54, 57, 99, 180, 229, 254, 304, 353, 449, 451, 521, 547の12項目である。

これらの諸項目群を使用して、黒崎において行ったと同じ問題点を捉えて行

こうとする。

この MMPI は ITESO 工科大の学生及びトラホムルコ、サンタクルズの若者達に対して行った。

先ず ITESO の学生について、全部カトリックであるが、第Ⅰグループ99名と第Ⅱグループ50名の学生をとる。この各グループを MMPI の宗教項目群にもとづいて、宗教+グループと宗教-グループに分ける。その場合指標として、宗教項目19の中で、最も中心的と考えられ、それらを信ずる人々の多い項目、4つへの反応の様相に従って宗教強、宗教弱を分けた。スペイン語MMPI の98, 115, 249, 483の項目である。

98は「私はキリストの再来を信ずる」、115は「私はこの生の後の他の生を信ずる」、249は「私は悪魔や地獄の存在を信ずる」、483は「キリストは水を酒に変えるような奇跡を行った」である。これらの四項目の中、三つ以上を信ずるものを宗教+、2つ以下しか信じないものを宗教-に分類した。すると宗教+が第Ⅰグループで55名、第Ⅱグループで33名となる。したがって宗教-は第Ⅰグループ44名、第Ⅱグループ17名となる。この両グループについて分析を進めて行くが、更に宗教+の中で特に強いもの即ち四つを信ずるものを宗教+グループとし、宗教-の中で特に弱いもの即ち一つ以下を信ずるものを宗教-グループとした。そして、これらの人々の不安度を測定したのである。

その結果は第Ⅰグループについて宗教+グループ55名の29項目を通じての不安度の平均値は16.22であり、宗教-グループ44名の平均値は13.34である。不安度は宗教強グループの方が高い。第Ⅱグループに関しても同様である。宗教+グループの不安度の平均値が27.27、宗教-グループの平均は24.01である。宗教強グループの方が不安度は高い。宗教+、宗教-を加えた場合も同様の傾向を示している。

第Ⅰグループについてが、宗教+33名の不安度の平均値16.27、宗教+55名不安平均値16.82、宗教-44名の平均値13.34、宗教-23名の平均値11.58である。宗教強は不安度は高い。第Ⅱグループも同様である。宗教+20名の不安度は26.04、宗教+32名の不安度平均27.47、宗教-17名の不安度平均24.01、宗



教ニ11名の不安度平均23.48である。ここでも全く同じような姿がみられている。

このような宗教強と不安度の高さとの問題は、カトリック的な文化統合の基盤に存する不安因子と関係していると考えられる。先にみた日本のクリントン・カトリック村落の場合にも同様のことが存していた。

次に以上のような諸点について、少し細かな分析を進めていく。

先ずMMPIの各宗教項目を信ずる割合について観察しておく。表Iである。

表 1.

	[I] 宗教+ (55) 名	[I] 宗教- (44) 名	[II] 宗教+ (33) 名	[II] 宗教- (17) 名	サン タク ルツ	トラ ホーム ルコ	黒 崎 中 学 三 年 (+)
98 私はキリストの再来を信ずる。	83.63 %	25 %	75 %	17.64 %	100 %	40 %	20 %
115 私はこの生の後の他の生を信ずる。	100	43.18	93.75	58.92	58.33	90	45
249 私は悪魔や地獄は存在すると信ずる。	76.36	6.81	93.75	11.75	90.9	71.42	20
483 キリストは水を酒に変えるような奇跡を行った。	100	45.45	100	29.14	90	100	5
27 私はしばしば悪霊につかれる。	1.85	2.27	3.12	0	8.33	50	
53 サセルドーテは祈りや、あなたの頭に手を置いて、病気をなおすことができる。	12.72	9.09	9.37	5.88	18.18	40	
58 すべてのことはバイブルの予言者がそれを予言したように起きている。	60	22.72	62.5	29.52	50	75	10
95 私は殆んど毎週教会に行く	70.9	22.72	84.3	17.64	50	50	
258 神の存在を信ずる。	100	88.63	100	82.35	100	100	60
373 真の宗教は唯一であることは確かである	78.18	27.27	81.25	29.41	66.66	100	45
420 なみなみならぬ宗教体験をもっている。	56.36	6.81	59.37	23.52	50	57.14	
490 週に度々祈りの本をよむ	34.54	4.54	9.37	5.88	27.27	28.57	0

社会性平均値			不安度平均値		不安度平均値	
宗教+	宗教-	宗教+	宗教-	宗教+	宗教-	宗教+
9.66	8.2	16.82	13.34	16.27	11.58	26.04
9.418	8.65	27.47	24.01	26.04	23.48	
9.0	8.35					
8.43	7.90					

この表1を、ここに提示するのは、国民の殆んど全部がカトリックであるメキシコのカトリック信仰の姿の概観を知っておく為である。ITESOの学生では「神在りとするもの神の存在を信ずるもの」宗教+では第I、第IIグループ共に100%である。宗教-groupでも第Iグループ88.63%第II groupで82.35%である。「キリストは水を酒に変えるような奇跡を行った」とするものは宗教強グループでは第Iも、第IIも100%がこれを確信しており、宗教弱グループでも第Iが45.45%、第IIは29.41%がこれを信じている。来世有とする思考も強い。宗教強グループは第Iが100%、第IIが93.75%である、宗教弱グループでも半ばに近い。第Iグループが43.18%、第IIでも58.92%が来世有りとしている。悪魔や地獄有りとするものは、宗教強グループで第I 76.36%、第IIが93.75%宗教弱グループになると非常に少なく、6.81%と11.75%である。キリストの再来の信仰、終末の思考も強く、世界のことはすべてバイブルの予言者の予言通りに起っているという考え方も宗教強群では第Iグループ60%第IIグループ62.5%である。宗教弱群でも第I 22.72%第II 23.52%である。彼等が工科大生であることを考えると驚くべき姿である。特殊の宗教体験をもつとするものも第I第IIグループとも宗教強集団では60%に近い。毎週教会に行くものも多い。

これらの諸項目はサンタクルツ、トラホムルコの若者の場合も同様に多い。老人や壮年の場合ははるかに強くなる。神の存在の確信は両村でも強い。両方でMMPIの結果では100%である。水を酒に変える奇跡についても、トラホムルコで100%サンタクルツでも90%である。悪魔地獄有りがトラホムルコ71.42%サンタクルツ90.9%、来世有りとするものや、キリストの再来の確信も多い。世界のすべてのことはバイブルの予言者の予言通りに起っているとするものはサンタクルツで75%、トラホムルコで50%である。特殊の宗教体験有りについても、トラホムルコが57.14%、サンタクルツ50%である。両村での姿は、イテソの学生の場合とほぼ同様の姿を示している。トラホムルコで<sup>[27]</sup>悪霊がつくとか<sup>[53]</sup>治病の項目が比較的高いのは、ここにブルーハス<sup>呪医</sup>がおり、人々が皆そこに行くということもあり、このような方向の思考が強いからである。ト

ラホムルコでは先ずブルーハス呪医の処に行ってから、医者の方に来て、またブルーハスに行く。60%の人々は呪医の方に行く、と医者が述べている。この医者自身がこのメカニズムに強い興味をもっていた。

このような宗教項目19を通して、宗教度を測定をなした。しかしここで使用した宗教+宗教+宗教-宗教-は、ここでの宗教度測定に相当と考えられる再来、来世、悪魔地獄、水を酒にの四つの指標の姿によった。

次に不安強度測定にかかわるものをみて行く。

先ず普通の MMPI の分析、Hs,Hy,Dr,Pt などに関する分析を行った。表2である。各群の平均値である。

表 2.

	L	F	K	Hs+.5K	D	Hi
宗教+				13.90	19.92	21.64
宗教-				13.41	20.79	21.67
宗教+	6.87	2.45	18.54	14.37	19.25	21.58
宗教-	6.38	4.72	18.38	12.66	21	21.33

  

	Dp+.4K	Pa	Pt+K	Es+K	Mc+.2K	Si
宗教+	22.07	9.66	25.64	26.43	21.09	22.04
宗教-	21.88	9.61	25.05	25.76	20.94	23.61
宗教+	22.12	8.87	25.08	26.04	22.16	20.87
宗教-	22.88	9.05	24.88	25.66	21	23.33

この分析からは結果は出なかった。そこで黒崎でも行った不安スケールの分析を行ったのである。全体値としては、第I group, 第II group とともに宗教強groupが宗教弱groupより anxiety の高さを示していた。そこで次に、どのような項目で第I 第II ブループを通じて宗教強が anxiety の高さを示したかをみていくと、<sup>217</sup>「何かにつけよく心配する」<sup>236</sup>「私はとても心配性です」<sup>340</sup>「時々容易に眠れない程興奮する」<sup>362</sup>「多数の人々より sensible 敏感です」<sup>388</sup>「暗がり一人にいるのは怖い」<sup>442</sup>「心配の故に眠れなかった期間をもって来た」<sup>555</sup>「時

々神経症の危機を感じて来た」などである。これらの諸項目場面で神経症というより心配性といった方がよいような姿を示していた。より心配するという姿である。これは不安因子とかわかり、弱い神経症的方向、心配性的方向を、宗教的な文化統合が含むということを示している。

これらの諸項目については、サンタクルツ・トラホムルコの人々も、同じような不安の方向を示している。

166の高い処から下をみると恐しさを感じるは、ITESO の学生の第 I group で宗教<sup>強</sup>が52.72%，宗教<sup>弱</sup>-group が22.72%で宗教強にこの傾向の強いことがみられるが、サンタクルツの人々ではサンプルの83%がこれを示し、トラホムルコの人々でも77%がこの方向を示している。217の“何かにつけてよく心配する”にしても、サンタクルツ 83%，トラホムルコ86%がこの方向を示している。236の“とても心配性で”についてはサンタクルツで 83%，340の“容易に眠れない程興奮する”についても66%，362の“sensible です”でも 58%，388の“暗がり一人でいるのは怖い”でも 91%がその方向を示している。431の“起り得る不幸を非常に心配する”も66%である。サンタクルツ・トラホムルコの人々も、何か心配性といってよい方向をもっているように考えられるのである。

次に、このような心配性、不安の方向をもつ、宗教<sup>+</sup>宗教<sup>+</sup>の人々が、社会性の高い度合を同時にもつという局局について観察する。

社会性測定に使用した項目は次の如くである。

- (54) 多くの知ってる人々の中にいると楽しい。
- (57) 私は社会的な人格です。
- (99) 私は喜びと大騒ぎのフィエスタや集りに行くのが好きです。
- (180) 初めて知り合った人々と話を始めることは困難でない。
- (229) いろんなクラブや組合に所属するのが好きです。
- (254) いろんな冗談をいえるグループの中にいるのが好きです。
- (304) 学校にいたときクラスの人々の前で話すのがとても困難でした。
- (353) 私は人々が集って話しているサロンに一人で入るのを恐れない。

- (449) 私は人々と一緒にいる為に社会的集りが好きです。
- (451) 気の合った友人のグループと一緒にいる時、私の心配は消えるように思われる。
- (521) 人々の前で、よく知っている何かについて議論をはじめたり、意見を述べたりせねばならないとしても、どぎまぎはしない。
- (547) 私はフィエスタや社会的集りが好きです。

これらの諸項目への反応の分析を通して、表1の宗教強度と社会性に関する結果が取り出されているのである。第 I group 99名についていうならば宗教+と宗教-グループの社会性の平均値が9.41と9.0であり、宗教度のより強い人々、宗教+で9.66、宗教度のより弱い人々、宗教-で平均値は8.43である。第 II group の場合も、宗教+の社会性の平均値は8.65に対して、宗教-は8.35、宗教+が8.2、宗教-が7.9である。宗教強が宗教弱よりも社会性の強い姿を示している。

この数値の取り出し方に言及しておく、先述の如く指標は12項目である。12項目全部に社会性の方向を示した場合、その人の数値は12となる。そのような形で評点化して、第 I group の宗教+の社会性の割合は、Data No301 が12、No. 303が10、No. 304 が12の如くであり、その平均値が 9.418 となる。宗教-の場合は、Data No. 205 が 9、No. 307 が10、No. 311 が8の如くであり、平均値は 9.00となる。宗教+group について平均 9.66 となり、宗教-group について 8.43とさがって来ている。第 II group についても同様の行き方がとられている。以上のようにして、宗教強度の強い方が社会性が強いといわれうらと思う。日本のキリシタン・カトリック村落の場合も、宗教+宗教+の人々は笑い楽しむようなパーティや寄合いに出席するのが好きであり、クラブや集合に入りたい方で社会的な方向の強いことが取り出されていた。宗教は強く社会的因子として受取られていることが考えられるのである。

先に取り出した不安、心配性の方向に関しては、カトリックの中学生の“私の希望”なる題目の作文の中に死の問題が入って来る姿や、T.A.T 風写真への反応場面で、キリスト者に黒白のコントラストが強く又黒い部分への反応が強い姿や、反応内容における neurotic な傾向の存在、また Free Association に

における“宗教的なものが進むにつれて、更に新しい悩みが現れて来る”などの反応なども、この宗教的なものにかかれる苦悩や内調整のメカニズムに関係しているものである。

メキシコのカトリック村落のメンタリティの中に、何かこのような不安とのかかわりを含むものがあるように考えられる。この結果は、日本側だけの観察からはキリシタンと迫害という特殊事情にもとづいて、その anxiety の存在を考えることも可能であるが、この両者を考え合わせることによって、カトリック的宗教文化統合が、この不安因子にかかれるものを含むことを示しているように思う。

### (三) 経済的局面をめぐって

次に、このトラホムルコ、サンタクルツ両村における経済的断面の姿を観察していってみる。

この両村落の観察の中から、ウェーバーがカトリシズムについて取り出したと同様の姿が取り出されてくる。ウェーバーの研究と同じく、カトリシズムが経済的上昇への方向をむいていないということをめぐる研究は多い。Günter Golde<sup>(3)</sup>の Stuttgart の近くの Hohenlohe-Franken の小地域の調査でも、同じ条件にある隣接のカトリック村落とプロテスタント村落の対比的研究がなされ、両者の経済的在り方について土地所有の姿を指標として比較がなされている。カトリック村落の場合には、1907年から1971年まで、ずっと同じ様な土地所有の様相がそのまま存続しているが、プロテスタント村落の場合は次第に上昇への道をたどっている。具体的に述べるならば、次のようである。ここでの土地所有を5~10ha(ヘクタール)、10~20ha、20ha以上の三つに分ける。するとカトリックの場合は10~20haが1907年でも最も多く、20ha以上ほんの少ししかない。この形を1970年でも同じようにたもっている。これに対して、プロテスタントの場合は1970年では5~10haが最も多いが、1960年で10~20haが最も多くなり、1971年では20ha以上が非常に多くなって来ているというような上昇方向への変化を示しているのである。このような形のプロテスタンティズ

ムとカトリシズムの経済的局面的比較に関する研究は多い。カトリシズムが経済的上昇にかかわらないという方向である。中世カトリシズムと清貧とはイミタツイオ・クリスティなどにもみられるように強いつながりをもっていた。清貧は高い徳目として捉えられている。マックス・ウェーバーのプロテスタンティズムの倫理と資本主義精神に関する研究は、裏がえせばカトリックの経済的態度の伝統主義的な姿を示している。

その姿は現在も全く同じ形で、この両村落にも存している。メキシコ全体に存しているといってもおかしくはない。貧困はメキシコの一つの代名詞でもあった。これは後進国なるが故のみではない。そのカトリック文化の基底にその根拠の一つが存していると私は考えている。

次に、このトラホムルコ、サンタクルツ両村落の日常生活における経済的側面にかかわる姿を観察していってみる。

先にも述べたように、トラホムルコ、サンタクルツはともに行政的にはトラホムルコに属する。トラホムルコは本村であり、役場のある処であり町長もいる。商業的因子がサンタクルツよりより強く入って来ている処である。サンタクルツは遙かに農村的である。教会がありその南に新しいプラサがあるが、その南側に二部屋の五坪程の支所があり、ペプシコーラなどを売る小店がある。教会とオスピタルの間にも小さな商店があり、コーラや酒タバコなどとともに雑貨を売っている。このような小商店がサンタクルツ全体で四軒ある。商業的因子は弱く、強く農牧的である。

トラホムルコはコーラや雑貨などを売る店が8つ程もあり、中央のプラサには比較的常設の市場もある。銀行も教会の向側にあり、近代的商店も二、三ある。教会の前に銀行と対しているゴンザレス家の店は比較的小さな日本のスーパーの $\frac{1}{4}$ か $\frac{1}{5}$ 程のものであり、店は美しい。ビジェガ家の店は10m×2m程の倉庫のような感じではあるが、衣服からおもちゃなども含む雑貨を売っている。煙草やペプシコーラなどもある。店の裏側の部屋にも商品が山積みされている。ゴンザレス家の当主も7人の町の町会議員の一人であり、ビジェガ家の主人の母も同じである。大きな家族集団の代表者がこの村の町会議員を構成して

いる。教会から南に 300 米程の処に菓子工場が造られている。ナンキン豆の加工菓子などをドイツからの巨大な機械を輸入して作成している。250 人程この村の人々を使用している。近代的な美しい洋菓子も作成し、人口 200 万のメキシコ第二の都市グアダハラハラの菓子専門店にも売出している。処でこの工場から北に上ると、大工の Castro Pacas の家の前に来る。

彼はよく働く。月収は一万八千円で、四歳程の一番下の娘がナンキン豆を焼いて、五、六個いくらで。家の前で並べて売っている。手助けである、子供達は小学校だけで裁縫工場などで働いている。12歳の美しい娘は裁断機で指を切り落してしまっている。家族は多い。彼等は歌やダンスを好み、極貧ではあるが楽しげである。皆白人である。

煉瓦や瓦の作成にも、相当数の人達が従事している。焼き方は、木を並べて、その上に土をこねたものを型木に入れ、煉瓦や瓦の形にしたものを並べ10m×5m ぐらいの高さ 2m 程のかまを造って火を入れる。貧しい仕事である。工人の賃金は日120ペソ、1,200円である。トラホムルコは50%が農、50%がその他といわれている。

サンタクルツの村の横を通る高速道路にそって、セメント工場が最近造られている。旧来のサンタクルツでなく、新しい地区の人々がここで働いている。しかし村それ自体は全く農村的である。

私のパーティシパントであるミランダ家の長女は今サンタ・アンタにおり、長男は毎日グアダハラハラの工場に通勤し、14人の子供の下から4番目の娘は高速道路のガソリンスタンドに勤務している。しかしこのミランダ家の場合も部屋は2部屋であり、土間の食堂部と納屋と内庭をもっているが、便所はただ平らな部分で、どこにもへっこんだ部分はない。私はいつも隣家の便所を借用していた。外からの近代化の波とは別に、村自体では馬やろばがまだ重要な道具であり、毎日曜の闘牛は重要な娯楽である。精神的、文化的にはまだ中世的因子が強く存している。教会は中心的で最も大切なものであり、10日以上にもわたるマリア像の peregrinacion 巡回と、マリア像の民家への宿泊は最も重要な行事でもある。ここに西歴 384 年のニケヤ・コンンタスチノーブルのクレドー



と殆んど全く同じものが、小児用のカテキスマの本の中に含まれ教えられている。このことについては、別稿で言及した通りである。村自体の展開とは別に高速道路を通してグアダラハラからの近代化の波がおしよせている感じである、ここでも MMPI を行っているが、その結果については先に述べた如くである。村の各家々での面接の場面でも、これらの問題点をチェックしている。面接場面では、より強く否定的な方向に人々を引っばってみることも出来た。しかし、面接をした多くの人々について、そのすべてが、イエスは水を酒にかえるような奇蹟を行ったということを信じていた。また殆んど全部の人が日曜のミサには出かけていた。毎日ミサに行くものも若干はある。聖体拝領については、比較的少なく、年に一度、二、三週に一度、日曜ミサ每などを含んでいた。悪魔や地獄は有ると信ずるものと、否とするものは 12:5 の比率であり、来世の存在を信ずるものと、否とするものの比率も 13:5 である。キリストは再来するとの信仰に関しても 10:5 の比率で否定を含んでいた。とはいえ、このような永遠主義的な時間構造の上にたつカトリック的思考と temporalism の上にたつ近代的経済思考とは別の方向のものである。ここの経済はその文化の内側から近代化の方向に向かっているのではない。

ここに存する経済とカトリシズムの関係の様態について、村の全体的文化やメンタリティから考えて行く。トラホムルコにはプロテスタントの教会が一つあるが、それは激しい圧迫のもとにある。いたいたしい程である。20数年伝道して、家族としての信者は一つもない。二、三人で日曜の礼拝を行っている。水をかけられたり、物を投げられたりなどの迫害をうけている。ここメキシコでは、裏切者ルターなどの語は学術書の中にも現れている。このことはカトリック的メンタリティが強く社会全体を支配していることを示している。このカトリック的メンタリティと経済について、ウェパーの伝統主義的思考の側面をも加えて、考えていく。先ずチャバラ及びトラホムルコの1970年の具体的な収入統計をあげておく。(1970年センサスからである)

この二つの統計を通して、どの職種でも、月間500ペソから1,000ペソ、即ち月間収入日本円で5,000円から1万円が最も多い姿を示している。月間収入1

収 入

Chapala	Total	Suma	199	200	500	1000	1500	2500	5000	10000				
			ペソ 迄	ペソ 迄	ペソ 迄	ペソ 迄	ペソ 迄	ペソ 迄	ペソ 迄	ペソ 迄		ペソ 以上		
(トラホーム ルコの南 にある.)	6,962	6,445	516	1,704	3,096	613	218	131	41	24				
	2,248	1,995	184	602	1,058	75	35	32	7	2	農牧植林業			
	818	781	93	183	333	84	40	31	10	7	化成工業			
	987	975	15	92	673	164	19	9	2	1	建築業			
	585	510	59	146	171	74	34	18	5	3	商業			
	146	140	7	19	63	27	16	5	2	0	輸送			
	1,619	1,572	203	573	572	134	52	25	8	5	サービス勤務			
Tlajomulco	Total	Suma	199	200	500	1,000	1,500	2,500	5,010	10,000				
			ペソ 迄	ペソ 迄	ペソ 迄	ペソ 迄	ペソ 迄	ペソ 迄	ペソ 迄	ペソ 以上				
			8,788	7,637	897	2,267	3,841	384	132	72		21	23	
			5,804	4,999	562	1,575	2,654	123	43	33		7	12	農牧植林業
			959	885	81	267	442	66	18	7		1	3	化成工業
			292	285	8	33	192	40	9	2		1	0	建築業
			436	362	57	99	150	29	12	9		3	3	商業
105	101	8	15	46	24	6	3	0	0	輸送				
569	530	115	174	143	59	28	6	3	2	サービス勤務				

万円を越えると急速に落ちている姿が、チャバラでもトラホームルコでも、みられるのである。サービス業だけがもう一ランク下って500ペソまで、5,000円までが最多数項となっている。この表をみて行くと月間収入3,000ペソ、3万円の収入は、このような村落において中の上の収入であることが理解されて来る。貧しい収入である。

次にここで面接した人々の職業と収入について観察していく。

面接の場合も、農牧以外のものが多く入って来る。家具製造業の大工、ラベロのような家の建設業者、連邦の役人、サンタ・テナタの製紙工場で働いているもの、コリマの小商人、仲買商人、パン造り職人などが入って来ている。この人々の収入の月ごとの金額は、私の面接者では、ゴンザレス家、ビジエが家を除くと、6,000ペソが最高であり、仲買商人も6,000ペソ、日雇労働者5,000ペソ、大工、家具製造業の月3,000ペソ、同じ家具製造業月1,800ペソ、

更にパン製造業の800ペソなどがみられる。パン造りの月額800ペソは、日本円になおすと、月8,000円の収入である。全体として考えると月3,000ペソ、3万円の収入は、中の上の階層であることが理解されてくる。家具製造の大工の月間1,800ペソは一日60ペソ、600円の収入である。洋箆筒などを造っているが、引出しなどすきまだらけで、塗りなどもひどいものである。日本では商品にならないと思う。その洋箆筒は800ペソで造られていた。月額の収入の姿を表の形で記してみると、月間収入戸主分、6,000, 6,000, 5,000, 4,000, 3,000, 3,000, 3,000, 1,800, 1,000, 800ペソの如くである。1ペソは約10円であるので、6万、6万、5万となる。月6万円が最高である。月1万円、8千円は非常に低いものである。生活は苦しいものである。低収入の姿を示している。

次にお金へのこの人々の態度について、dinero (金) への Free Association の姿をみて行く。その反応群を少しあげておく。“多くのものの為役立つ”，“消費を払う為”，“欲しいものを買う”，“生きる為に必要”，“食べものを家族に買う為に必要”，“お金の為に働く”，“もっとお金を持ちたい”，“お金は価値がない”，“金は幸福を与えない”，“悪い金は価値がない”，“食べる為”などである。これらの事例の中で、金は食物や必要なものを買う為の道具としてのみ捉えられている。そこには現代社会での資本主義的な金の使用への考え方などは全くない。ウェバーが捉えたと同じ伝統主義的経済的態度のみが存している。この文化での内側からの経済的態度は明確に資本主義経済以前であるが、外側からは近代資本主義経済が強くせまっている。

この態度を“vivir bien y vestirse bien y poco trabajo” “たのしく生活し、よいものを着て、少しだけ働く”という言葉への同意の形で捉えていった。この言葉は面接の際にホセ・ミランダがそうありたいと自ら語った言葉である。entrevista 面接では必ずこの点を聞いている。ここでは、多くの人々が、これに同意している。しかし神の十誡に従ってとか、多く働いてなどの条件を附して同意しているものもある。近代的経済思考への方向はない。

このメキシコ村落は伝統主義的なものを強く保つ文化をもっている。

両親、家族の占める位置は大きく、生物学的親族関係だけではなく、儀礼的親族関係も強い。

ここでの父達の価値について、家族の価値について、“最も重要なもの”、“最も尊敬するもの”“恐しいこと”，などの刺戟語への Free Association の反応分析からみて行く。¿que es lo más importante pare Ud.? ¿……lo más respetable? ¿……lo que más teme? の如き形で捉えていったのである。

最も尊敬するものに、父達の出て来る頻度は極度に高い。尊敬するものとして父達、父と兄弟、両親、父と子供達、父、兄弟、年長者、両親を尊敬するなどの間に、神、神父、当局、権威などが含まれている。父は殆んどに含まれ、神が若干に含まれている。父、両親への尊敬の極度に強い文化である。家族への強調は“最も大切なもの”への反応にも強く現われている。大切なものは主として家族にかかわる。父と仕事、子供が勉強すること、子供達の教育、子供と父の健康、家族の健康、家族全体が一つになって生活すること、子供の勉強などが最も中心的な方向で、それに神を尊敬する。神の命の如くに生きるなどが入り、畑などが入ってくる。

このような反応の中にも家族のもつ重要性と父母への尊敬が強く現われている。このことは父の前では子が煙草を決してすわないなどの態度にも現れているが、weber のいう伝統主義的態度、両親の行動のパターンを変えない方向が強く存している。文化の内側からのものである。しかし、これに対して外側から近代経済の波が押寄せて来ている。子供達は高速道路による交通の容易化にともなって、グアダラハラやサンタ・アニタの工場に出て行く。ミランダ家の父は子供達が畑で働かないで都市の工場に出て行くのを嘆いている。今、畑では老人が働いて、その妻がそれを助けている。他村の人々が畑仕事に来ている。Tapalpa や Ferrerías の人々である。ここでは一日の賃金が120ペソであるが、Tapalpa では1日50ペソか60ペソであるからである。グアダラハラの工場はもっとよいからである。しかしこのトラホムルコに郵便局や電話局の出来たのはやっと10年程前のことである。

家族の様態に帰ると、面接の人々の場合も子供数は多い、12人、11人、11

人、10人、10人、9人、9人、6人などと多いが、若い面接者の場合も子供は7歳、6歳、5歳、4歳、3歳また、9歳7歳5歳3歳3ヶ月と近い年齢でつながっている。

このように子供数も多いが、村内の親族数も多い。村中殆んど全部が親族、250~300人、150人、100人、80人、50人、50人、等があげられているが、これは生物学的な親族にかかわる。儀礼的親族関係もここでは重要である。パドリーノは洗礼、堅信、ファースト・コミニオン、婚姻の折りの4人のパドリーノを各人がもっているの、10人12人の子供達のコンパードレは極度に大きなものとなる。ahijados 儀礼的の子の padtino 儀礼的父、madrino 儀礼的母への態度も非常に丁寧である。

Jose Lares と Margarita Marquez の家族の場合をとる。子供達は Maria del Rosario 7歳、Veronica 6歳、jaime 5歳、Imelda 4歳 Ma. Guadalupe 3歳であるので、婚姻などの padrino はまだ関係ないが、調査場面で記述出来たものだけで、コンパードレは次の如くである。

Jesus Chavez (友人) Locadio Navaro (叔父) Santiago Flores (友人) Miguel Perez (友人)

堅信：Jose Navarro (友人) Graciela Macias (女友人) Maria Guevarra (女友人) Esperanza Garcia, Eugenio Lares, Martha Flores などである。

Felipe Delgado と Ma. Elena Cortes の家族場合、子供達は9歳7歳5歳3歳6ヶ月であるが、コンパードレは、

Gorgonio Cortes (祖父) Guadalupe Gutierrez (夫の甥) Cesar Albe (夫の義兄弟) Guadalupe Gutierrez (父の義兄弟) Santiago Gutierrez (その子) Salvador Cortes (兄弟) Maria (Gpe の従姉妹) Laura Cortes, Juana G. Juan, Isabel Delgardis (妻の義姉妹) などであり、この場合は全部が親族である。

このようなカトリック的儀礼的親族関係が、生物学的親族関係の上に更にかさなって、人々を父達と同じ世界へと規制している。ここでもこの ahijados がコンパードレ達に余り迷惑をかけていない場合もあり、コンパードレが強く働いている場合もある。結婚相手の決定などの場面でも働いたりしている。

この人々は前述の如く毎日曜教会のミサに出席しているが、Iglesia (教会)なる刺戟語への彼等の反応は彼等の教会への態度を示している。

教会は、神の家、キリストの家そこで人々がたすけを祈る、神のもの、ミサ、神父、現実を理解する為、子供達と教会に行く、神の言葉を聞く、精神的によりかかる処、問題をもっときに行く、救い、問題があるとき教会に行く、教会は我等の神のものであるから、神の言葉を聞きに行く家である、神に乞う為に必要である、信仰をもつ人のいく処、una imagen (マリヤ像)に祈りにいく処、ミサに行く、教会で結婚するなどの反応群がみられる。

この地域の村々の人々の宗教的な姿を明確に示している反応群である。教会は単なる建物としてでなく、神の家として捉えられている。“恐れ”への Free Association にも死への恐れなどとともに神への恐れがみられている。

カトリック的心情は、殆んど学校などへは行っていないこの人達の心に柔らかい深いものを与えている。静かな、深いなどの形容詞に対する反応がそれにかかわる。

“静かな”への反応で。精神的に平和であること、満足している、教会にいて我等の主にいるとき平靜がくる、主が助け給うという信仰をもっている、心の静かさ、吾々の犯した罪の為に神に許しを乞うなどの反応がそれを示している。“深い”への反応の中にも、深い問題、悩みの中に感ずるもの、深い愛、深い苦しみ、クリスチャンとしてキリストを信じなければならない、信仰は非常に深いものである。深い言葉などの反応がみられうるのである。自然の深さでなく内容の深いものである。

二間の日ぼし煉瓦の土間の家々に、十人以上が住み、便所も借りたいと思わない家で、月三、四万での生活が普通であるこの村の人々の心の美しさを示す方向の事例でもある。以上が面接による研究を通して取り出されて来る人々の心や生活である。

グアダラハラでは全く西欧風の近代的な優雅な生活が行われているが、ここトラホムルコ、サンタクルツでの生活の実態である。その姿をここでは経済的側面から捉えてみようしたのである。カトリシズムは美しく立派であるが、経

済的には中世的である。

ここでは、ウェバーが伝統主義的生活態度とよんだもの、中世的カトリック的パターンと呼んだものは明確な形で存している。貧しさが支配しているが、人々はそのどかで楽しげでもある。“楽しいこと”への反応では、多くの人々が音楽やダンスをあげる。月収8,000円, 18,000円, 30,000円の収入であるが、彼等は音楽を好み、ダンスの中で明るく生活している。彼等はよきカトリックであり、教会に出席し、MMPI その他で取り出した諸事項を確信している。4世紀と同じ内容である。金への思考は明確にカトリック的中世的であるが、そこに高速道路にそって若い人達の中にほんの少しではあるが近代経済的思考が入って来ている処である。カトリック的宗教文化統合における経済的方向の思考や行動が明確にみられる処である。

#### (四)

本論文は初めに言及したように、宗教的文化統合の性格を明かにしようとするものであり、カトリシズムがどのような形で文化諸因子を色づけているかを、メキシコのカトリック村落の姿を通して明かにしようとしたものであった。

他稿において既に明かにしたことであるが、このトラホムルコ、サンタクルツの分析を通して、カトリック的空間構造が明らかな形でここに存在し、機能しており、また時間構造に関しても、カトリック的時間構造が存在していることが明かにされた。カトリシズムは、このように、空間構造、時間構造というような文化の基底的な処から文化を色づけていることが明かとなった。ここでは、社会構造に関してもカトリック的社会構造の存在が捉えられたが、本論文では ITESO 及びトラホムルコ、サンタクルツでの不安の姿や社会性の姿、経済的断面の姿の観察をなした。これらの諸局面についても、カトリック的諸特徴の存在が捉えられたのである。不安や社会性に関しては、日本のカトリック村落と全く同じ形を示していた。このようにみて来ると、宗教現象が文化全体を色づけている色づけ方が、その基底からのものであり、その文化の諸断面に

広範にかかわるものであることが明らかになってきた。特に空間構造，時間構造の色づけは意味的なものであり，Sorokin が *logico meaningful integration* といったものに強くかかわる局面をもつものである。日本での場合とメキシコでの場合の両者の姿を考え合わせることを通して，宗教による色づけ方の姿を捉えることが出来たと考えている。

なお，本調査において，宗教的文化統合の基底にある不安の問題にかかわることの出来たことは重要であると考えている。

最後に，面接調査といっても，サンタクルツのミランダ家の場合などは二ヶ月半毎日数時間にわたり，同家に滞在観察，家族との食事にあずかっていたのであり，トラホムルコのビジエガ家の場合も一月半にわたり屢々滞在，食事にもよくあずかったのであるが，このような家々とほんの一，二時間の滞在調査の処とがあることを附記する。なお，本調査はロペス教授，ビアンキ教授，ルツ・デ・ガルメン・ツェリスなどメキシコの人々の好意によって遂行され得たものであった。謝意を表したい。

#### 註

註1 野村暢清：キリシタン・カトリック村落の *religious cultural mentality* の研究，哲学年報31輯：宗教的統合の性格に関する研究，現代諸民族の宗教と文化，古野記念論文集。

註2 メキシコの場合も，本テストはイテソによって行われている。ビアンキ教授の好意による。

註3 Günter Golde, *Catholics and Protestants*

註4 野村暢清：トラホムルコ，サンタクルツにおける宗教的文化的統合の研究，西日本宗教学雑誌Ⅱ